

龍瑛宗と戦後

——未刊の日本語小説から——

新 谷 秀 明

光復（日本の敗戦）をはさんで二つの時代を生きた台湾本省人にとって、「国語」が意味するものが日本語から中国語（北京語）へと切り替わったという事態は、複雑かつ深刻な状況をもたらすものであった。とりわけ日本語文によってのみ表現の手段を保持していた台湾の日本語作家たちは、異民族による植民統治から脱した喜びとは裏腹に、表現手段を奪われ、場合によっては生活の糧さえ失うほどの現実的苦境に一気に直面することになる。光復後、国民政府は一年余りの猶予期間ののち、一九四六年の十月には新聞雑誌など日本語の刊行物を完全に禁止するが、この余りにも短い時間の中で言語の切り替えを強制されることは彼らにとって過酷であったはずだ。

このような状況のなか、当然ながら日本統治期に活躍した日本語作家のほとんどが戦後は筆を折り、再び表舞台に立つこともなかったが、例外的に戦後も日本語創作の道を探った作家もいた。目に見える成果を出したのは、日本語の長編小説『^①地に這うもの』を日本で出版した張文環である。そしてもう一人、今回取り上げようとしている

龍瑛宗も、張文環の小説出版を励みに日本語作家としての再起を模索した。しかし結果的には、張文環、龍瑛宗ともに戦前の台湾文壇における華々しい活躍とは対照的に、張文環の長編小説は大きな話題になることもなく、龍瑛宗にいたっては生前に活字にできた日本語作品はわずかに地方同人誌に寄稿した「夜の流れ」のみであった。

本論は龍瑛宗の戦前の旺盛な作家活動をも視野に入れながら、おもに戦後の環境変化を経てどのように晩年の日本語創作へと至ったのか、その変遷を跡づけるためにいくつかの戦後作品の分析を試みたものである。

一 龍瑛宗作品の刊行状況、および先行研究

龍瑛宗（一九一―一九九九）、本名劉榮宗、新竹州北埔郷の生まれ。客家人である。台湾商工学校卒業後、台湾銀行南投支店に就職、その後台北本店に移る。一九三七年、処女作「パイヤのある街」が『改造』第九回懸賞創作の佳作推薦作品として入賞したことにより、内地の文壇で注目を集める。その後は順調に長短編小説、詩、評論等を台湾の文芸誌を中心に発表し続け、日本統治期台湾文壇の主要作家の一人となる。一九四〇年、台湾文芸家協会が成立、機関誌『文芸台湾』の編集委員となる。一九四二年、台湾銀行を退職、台湾日日新報に入社。またこの年に東京で開催された大東亜文学者会議に台湾代表として西川満、濱田隼雄、張文環とともに参加し、「皇軍に感謝」と発言している。一九四三年には日本文学報国会台湾支部の幹事を務め、「台湾文学決戦会議」に参加、ここでも「八紘一字精神」について発言している。

光復後は日本語雑誌『中華』、及び『中華日報』日本語版の編集者となるが、四六年に日本語出版物が全面的に

禁止されたため、一時的に職を失う。光復直後から日本語禁止までの一年余りの期間には、短編小説「青天白日旗」^②、「汕頭から来た男」^③、および多数の詩、評論、随筆を、自らの編集する『中華』と『中華日報』を中心に、加えて『新新』など若干の他誌にも発表していた。

四七年に民政庁に再就職、四九年には合作金庫に転職し、ようやく生活が安定する。一九七六年、六十六歳で合作金庫を退職。銀行員として働いたこの三十年足らずの期間は、国民政府が出していた日本向けの宣伝誌『今日之中国』^④に随筆や作家紹介の短文を書いたり、七〇年代中盤以降になっていくつか中国語の随筆を書いている以外は、本格的な文学創作は基本的小おこなっていないと見てもいい。七七年から八〇年にかけて再び筆をとり「媽祖宮の姑娘たち」、「夜の流れ」、「紅塵」等の分量のある日本語小説を書いたのは、やはり退職後に時間的余裕が生まれたことが第一の理由だと言えるだろう。

次に先行研究および関連する龍瑛宗著作の刊行状況に触れておきたい。戦前には文芸時評などに龍瑛宗に言及するものも多かったが、戦後最も早く龍瑛宗を本格的に研究対象として取り上げたのは、おそらく一九七九年の塚本照和「『台湾文学』に関するノート（一）——龍瑛宗の『パイヤのある街』」^⑤であろう。これは代表作「パイヤのある街」を詳細に分析した作品論である。論文ではないが、戦前の台湾文壇を熟知する池田敏雄の回想記「『文芸台湾』のほろ苦さ——龍瑛宗氏のことなど」^⑥は当時の台湾文壇における龍瑛宗の立場をよく伝えている。九〇年代に入り、日本では植民地時代を含めた台湾文学研究がようやく盛り上がりを見せるが、その中で山田敬三「哀しき浪漫主義者——日本統治時代の龍瑛宗」^⑦が龍瑛宗の戦前作品についてその時点で可能な限り包括的に取り上げ、本格的な龍瑛宗研究の先鞭をつけた。

その後二十年を経る間に日本と台湾で植民地時期台湾作家の研究が深化する。その中で和泉司『日本統治期台湾と帝国の〈文壇〉』（『文学懸賞』がつくる〈日本語文学〉⁸）の第三章、第七章はそれぞれ龍瑛宗の「パイヤのある街」と「蓮霧の庭」が論じられ、「文壇」という視点を取り込んだ独創的な論が展開されている。また王恵珍『作家龍瑛宗の文学軌跡』⁹は龍瑛宗研究の最初の専著として注目される。和泉氏と王氏の論著には筆者も啓示を得るところが大きかった。このほかにも単独の論文としては工藤貴正「龍瑛宗『紅塵』の描く歴史としての文学―半身不随の知識人」¹⁰があり、また台湾では若手研究者を中心にさらに多くの論文が発表されている。

現在では『龍瑛宗全集』¹¹が存在することにより資料的な困難は大幅に改善されているが、例えば山田論文が発表された九〇年代中頃にはまだ資料的な面で限界があった。山田氏は論文の中で「日本統治時代に書かれた小説には、以下のような作品が知られている」として計二四篇の小説を列挙し、その数については現在『全集』で確認できるものと大差はないが、しかし実際には「作品すべてを目にしえたわけではない」とし、典拠とする資料は『新文学雑誌叢刊』を中心としたいくつかの資料に限られている。戦後の作品についてはそもそもこの論文の対象から外れているため言及されていない。

前掲池田敏雄回想文の末尾には植民地作家たちの戦後にも触れられており、張文環『地に這うもの』に続き龍瑛宗が「紅塵」を完成したこと、しかし「それはまだ活字になっていない」ことが述べられている。同じ頃熊本の人誌『だあひん』が龍瑛宗の自伝的小説『夜の流れ』を掲載しており、¹²これが彼の生前、戦後の日本語作品で唯一例外的に公刊できたものになった。「紅塵」の活字化は、その後二十数年を経た二〇〇二年の『日本統治期台湾文学集成1』への収録を待たなければならなかった。¹³

二〇〇六年に待望の『龍瑛宗全集』中文版が、二〇〇八年には日本語版が国立台湾文学館より発行された。中文版は台湾の研究者と一般読者が龍瑛宗作品にアプローチするために大きな便宜を図るであらうし、一方日本語版は、戦前の作品についてはほとんどすべて原載誌からの影印で収録されているため、研究資料としての価値は高い。また『全集』は龍氏の生前からすでに編集の計画があったらしく、主要な作品以外にも評論、随筆、短文、座談会記事など、あらゆる文章が網羅的に収録されており、今後の龍瑛宗研究に十分な資料的根拠を与えうるものとなるであらう。

二 光復直後の小説「青天白日旗」——旗の持ち替えとして

龍瑛宗の戦後という課題に向き合うために、まずは彼がどのように日本の敗戦を迎えたのか、という問題から入りたい。龍瑛宗が内地文壇デビューを果たした一九三七年は日中開戦の年であり、台湾における皇民化政策はここから急速に強化に転じていく。むろん龍瑛宗自身の本意ではなかっただろうが、否応なしに戦時体制に取り込まれていくことには抗えなかった。特に目を引くのが四二年十一月の第一回大東亜文学者大会への参加である。この会議に招聘された他の「外地作家」たち——台湾、朝鮮、満洲、および占領下の中国が含まれる——と同じく、靖国神社や樺原神宮を神妙な面持ちで参拝、会議では主催者側が準備した、大東亜聖戦賛美の原稿を読んだ。台湾でも四三年に開かれた「台湾文学決戦会議」に参加、四四年には「台湾文学奉公会」から高雄海兵団に派遣され、一週間滞在、その体験を小説「若い海」¹⁴に反映する。この小説は総督府の出版した『決戦台湾小説集』に収録される。

この作品は、例えば皇民作家とも称された周金波の「志願兵」のような、観念的に皇民練成を肯定するような内容は持たないが、故郷を離れ海兵団に入団した二人の青年二等水兵、森川（在台日本人）と王祐坤が日々カッター訓練に勤しむ初々しい姿を淡々と描いている。しかしその中にも、森川は実家から郵送された「武運長久」と刺した千人針を受け取り、王は実家の母が「毎晩、熱心に国語講習所に通って、漸く習ったばかりの片仮名で」書いた手紙を受け取って感動する場面が書き込まれている。「決戦小説」との看板からするとずいぶん柔らかい手ざわりの小説ではあるが、前線に出る兵隊と家族の支えという戦時下の課題、さらにそこに日本語の習得という皇民練成の課題も重なることによって、台湾独自の戦争文学として成り立たせているところに作者の熟練度がうかがえる。

このように、文壇での立ち位置においても実作においても従順な植民地作家の風貌を装っていた龍瑛宗であったが、光復直後に発表した短篇「青天白日旗」のあまりの変貌ぶりには驚かされることになる。「青天白日旗」は原載誌でわずか四頁のごく短い小説で、登場人物は街へ龍眼の実を売りにきた阿炳と六歳になる息子の木順、青天白日旗を売る男、そして日本人の巡査である。時は九月、日本降伏直後の街には「台湾光復」「感謝祖国」「建設三民主義的新台湾」などの中国語のビラが貼られ、人々の表情は喜びに満ちあふれていた。阿炳もそれを見て、今まで台湾人がどれだけ惨めな目に遭っていたかを思い、祖国復帰の感慨にふける。一人の男が青天白日旗の小旗を売っているところに出会ったので、父は息子に小旗を買ってやる。息子が小旗を掲げ帰り道を急いでいると、前方から日本人巡査が歩いてくる。阿炳は青天白日旗を持っているところを巡査に見つかると殴られると一瞬思い、反射的に身を隠そうとしたが、次の瞬間「俺は歴とした中華民國人だ」と思い直し、堂々と歩くことにした。案の定、巡査はじろりと一瞥しただけで通り過ぎていく。親子は、青天白日旗を高く差し上げ、「中華民國、万歳！」と叫ぶ。

この「青天白日旗」が掲載された『新風』は光復後最初に創刊された月刊文芸誌で、昌明誌社という発行母体より一九四五年十一月から四六年一月までの三号のみ発行されている。そのうち創刊号だけが日文欄を設けており、龍瑛宗の小説を冒頭に、陳董「歛びの日を迎へて」、頼起鑑「光復雑感」、野馬「祝福された存在」の三篇の短文を加えて計四篇の日本語文を掲載している。創刊号の巻末には「賛助員」表があり、龍瑛宗も賛助員として名を連ねている。なおこの『新風』と同じ頃に創刊された日文・中文並載誌に月刊『新新』があるが、こちらは四七年一月まで継続し、龍瑛宗をはじめ呉濁流ら日本語作家の貴重な発表の場となっていた。

さて「青天白日旗」はまさに龍瑛宗が日章旗から青天白日旗へと旗を持ち替えたことを示しているわけだが、光復以前の時局迎合的表現と見比べた場合、それを無原則な変節と批判することもあるいは可能だろう。しかし『新風』創刊号の誌面全体にわたって「光復」「祖国」「慶祝」等々の文字が躍る祝賀一色のムードのなかで「青天白日旗」を読むなら、なんらの違和感も感じられない。この小説は新時代に船出する一つの文芸誌にふさわしい作品なのである。街角に貼りめぐらされたピラ、国旗というわかりやすい小道具、そして残留する日本人巡査、こうした定番の要素を散りばめて、台湾民衆と巡査の上下関係が逆転したことを示しながら、五十年の日本統治を脱した台湾人の喜びをあらわす。言い換えればそれだけの要素しかないシンプルな作品なのである。つまり龍瑛宗は、この作品に関してはまさに旗を振るための便法と徹底した割り切り方をしていたのではないだろうか。文学者としての節度や原則のようなものを一旦度外視し、何らかの政治的位置を確保することがその当時の龍瑛宗にとっては必要だった。「青天白日旗」はそのための意思表示ではなかっただろうか。このあと当面は続く（と予想された）新聞雑誌の日文欄、彼はそこに活動の場を求めるしかなかったわけで、新たな条件の下で再出発するために彼自身が

「旗を持ち替えた」ことを誰にもわかる形で示すことは、彼にとって最低限必要な作業であったと思われる。

ところが前述したとおり、彼ら日本語作家の息の根を止めると言うべき、日本語使用の新聞雑誌が全面的に禁止されるという事態がすぐにおとずれる。龍瑛宗が台南で編集を担当していた『中華日報』日本語版もその時点で発行停止となり、日文編集部は解散することとなる。

三 「媽祖宮の姑娘たち」——記憶の封印

周知のごとく台湾では新聞雑誌の日本語禁止後、まもなく二二八事件が発生、戒厳令が施行され、外省人による強権的支配が日常化する。同時に国語（標準中国語）普及政策が急速に進められていく。二二八事件で外省人に反旗を翻した本省人たちの言語的紐帯が日本語であったことからも知れるとおり、戒厳令下の台湾では本省人の言論とともに日本語使用が抑圧の対象となった。

龍瑛宗は『中華日報』日文版主筆の職を失ってから民政庁に就職するが、「薄給のため、生活が困窮」⁽¹⁵⁾したという。中国語の能力がまだおぼつかない本省人にとって、役所仕事は相当な困難がともなったであろうし、したがって俸給面でも冷遇を甘受しなければならなかったことは推測できる。四九年六月には合作金庫に入社、貯金部預金課長となり、本来の職業であった銀行員に戻ることになる。「龍瑛宗略歴年表」によれば、その後一九七六年に退職するまで、合作金庫研究室、人事室、行員福祉社、稽核室（会計監査室）と異動し、最後は合作金庫専門委員という肩書きで退職している。前述したとおりこの間に発表した文章はごく少数であり、数編の中国語の随筆（他者

の翻訳による」と、『今日之中国』に発表した日本語の随筆数編、作家紹介の短文十数編のみである。王恵珍氏の研究によれば、『今日之中国』創刊当初から龍瑛宗は編集者として積極的にかかわっており、おもに本省人作家の作品を日本語に翻訳して紹介した。彼は「この機会を使って本省籍の文学仲間を再結集¹⁷」しようとしていたが、途中で編集長が代わり、その後は外省人作家中心にシフトし、龍瑛宗も執筆の場を失う。『今日之中国』自体も七二年に国際情勢の変化の影響を受けて廃刊になっている。

このように戦後の銀行員時代にも機会のある限り日本語による執筆をおこなってきた龍瑛宗だが、それはほとんど短い随筆、評論などに限られる。小説では五〇年代に執筆した未発表の短篇小説「故園秋色」¹⁸が唯一あるが、それ以外の比較的分量のあるものはいずれも退職後に書いている。本論ではこのあと、退職後最初に書いたと考える「媽祖宮の姑娘たち」¹⁹、および龍瑛宗がもっとも精力をつぎ込み、発表を切望していた長編「紅塵」の二編を取り上げる。執筆順にまず「媽祖宮の姑娘たち」から見ていきたい。

「媽祖宮の姑娘たち」は「(一) 同学会」から始まり「(十二) 老妻と共に」まで全部で十二の小節から構成されている(以下、便宜上第一節、第二節……と称することにする)。ストーリーの中心になる人物が林克三、そのほかに范琦、呉大徳、陳新権、日本人の野上、篠原、根石が登場する。彼らは植民地時代の中学校の同窓生であった。戦後、いつからともなく彼らは毎年の同学会(同窓会)を開く習慣ができ、酒を酌み交わしながら日本時代の昔話に花を咲かせるのを楽しみにしていた。林克三は「客家族の出」であり州庁の所在地である「S市」付近の村の出身ということから、新竹州北埔出身の客家である龍瑛宗自身がモデルとして反映されているようだ。第一、第二節は林克三の生い立ちと植民地時代の様々な側面が語られる。第三節では同学会で改姓名が話題になるようすが描か

れる。林克三は林を「はやし」と読み替えて改姓名したことにし、そのほかには呉大徳が呉（くれ）太郎、陳新権が石井権左衛門と改姓名していた。第四節では座が盛り上がり台湾拳（じゃんけんのようなもので負けると罰杯を飲む遊び）をやりはじめ、そこからまた植民地時代の記憶がとぎれとぎれによりみがえってくる。このようにこの作品の前半は、同学会の話から植民地時代の回想が引き出されていく、その形を何度も繰り返すことによって、複数のエピソードを積み重ねていく、というスタイルをとっている。

第七節の終わりに、一九五〇年に日本商社の台湾入国がはじめて許可されるというニュースへの言及があり、それを受けて林克三は「いよいよ日本人が台湾にやって来るな」と思い、かつての同級生だった日本人たちに思いを馳せる。第八節で同窓生の野上がついに彼らの目の前に現われるが、同じ同窓生の篠原と根石は戦死していたという知らせが野上からもたらされる。このあたりから死んだ篠原と根石に対する林克三の追憶が中心になり、前半の植民地時代の解説のような筆致は影を潜め、克三と二人の日本人との個人的な交流がノスタルジックな風情を帯びながら描かれていく。特に印象深いのが、第十節に描かれ、小説の表題にもなっている、媽祖宮の祭りと根石の娘買いの段である。

林克三の故郷の村で年に一度三日間にわたって繰り広げられる中元祭りの日、色鮮やかな神々が祭られる賑わいの中、粗野で奔放にふるまう村の若者たち。日が暮れるとあちこちの物陰で交わる男女の姿、それを目の当たりにする根石。媽祖宮の裏の農家の中には貧しさのあまり体売の娘がいると克三から聞いた根石は、翌年の中元祭の際、欲望の赴くままに克三に女の仲介を依頼する。克三はさらにその方面に詳しい友人の助けを得て、根石、克三、その友達の三人が媽祖宮裏に広がる茶畑のうらぶれた農家の戸を叩く。素朴で無口な娘が応対し、まるですべてが

予定調和のように根石と娘が奥の間へ、他の二人が表の間で茶を飲んで事が終わるのを待つ。この一夜のできごとが、淡々と、郷愁を伴った記憶として語られる。

北埔には現在も慈天宮と呼ばれる有名な廟があり、主神として媽祖を祀っている。またここでは一九〇七年に大規模な抗日暴動、いわゆる北埔事件が起こっており、五七名の日本人が殺害された。そのなかで幼くして命を奪われた五人の子どもの追悼して「五子之碑」が事件後に建てられているが、小説の中にも「遭難碑」としてこの碑が登場し、根石と克三がそこを訪れる場面がある。これらのことから小説中の媽祖宮のある村は龍瑛宗の出身地である北埔をそのまま描いていることは明らかであろう。「媽祖宮の姑娘たち」の後半部は、龍瑛宗が熟知する北埔の民俗習慣や土着の人々の生活を舞台背景としながら、植民地時代の記憶を共有する同窓生——とりわけ二人の戦死した日本人同窓生——を登場させ、はかない夢のごとき郷愁を醸し出すことに成功している。

根石との間にこのような極めて個人的な記憶を持った克三は、しかしその後再び根石とともに媽祖宮を訪れる機会はなかった。やがて二人とも学校を卒業し、根石は内地へ帰国、克三は無職でぶらぶらしていたところに官僚になった篠原と偶然出会い、篠原の紹介で職を得た。内地から根石が時折寄こす手紙には、またあの媽祖宮の姑娘に会いたいと書かれていた。そのうち根石は入隊することになり、やがて手紙の往来も途絶える。戦後になって日台の往来が始まった後、ようやく林は根石の戦死を知ることになるが、その時によりがえった記憶の一画面に、根石と二人で見た媽祖宮内の地獄絵があった。その時克三は根石にこんなことを言った。

「鬼たちは可哀そうだ。人間世界よりもっとひどい責め苦に遭っているな」
すると根石は、

「そうね、でもここの鬼は、みんな台湾の着物を着ているじゃないか」と返す。

人は死ぬと鬼になると小さい頃から教えられてきた林克三に対し、「台湾の着物を着ているじゃないか」と言った根石は、人間の死後について達観した考えを持っていた。克三はそのような根石がすでに戦死していたという知らせに関して複雑な思いにとらわれていく。

この作品の最後を龍瑛宗はこのような言葉で締めくくっている。

この日本文化の波をちよつぱりかぶった同学たちは、徐々に確実に時間に運ばれながら、生の地平線下の永遠の忘却の黒い深淵に呑みこまれてゆくであろう。

台湾人と日本人が同じ過去の時間を共有したという記憶、しかしその記憶は永遠のものではなく、彼らの死によってやがては「黒い深淵」に消滅してしまうのだという諦念がここには語られている。さらに踏み込んで言うなら、日本語でこの小説を書くという行為そのものが、その記憶を繋ぎ止める作業なのではないだろうか。作者にとって特別な意味合いを持つ言語——日本語によってしかその作業はなされないはずであるから。

四 「紅塵」——「パイヤのある街」の戦後版として

『龍瑛宗全集』によると長編小説「紅塵」は一九七八年十一月脱稿とあるので、七七年から七八年にかけては「媽祖宮の姑娘たち」、「夜の流れ」、「紅塵」と分量のある日本語作品を立て続けに書き上げることになり、退職後の旺盛な執筆活動がうかがい知れる。「紅塵」は鐘肇政によりすぐに中国語に翻訳され、『民衆日報』副刊に連載、そののち一九九七年に遠景出版社から単行本として刊行されている。前述のように龍瑛宗はこの小説の日本語での発表を希望していたが、最初に日本語で活字化されたのは二十四年後の二〇〇二年であった。「紅塵」の内容についてはすでに下村作次郎氏の「解説」もあり、そのほかに作品論も複数あるので、ここで詳しく梗概を記すことは避け、必要最低限の概要のみ示しておきたい。

主な登場人物は劉三奇、王秀山、林駿、黃廷輝の四人。みな日本時代を経験している本省人で、戦後の台湾社会ではそれぞれの地位と職業についている。

劉三奇は戦前は日本人会社の小使い。戦後は一念発起してプラスチック製造会社を立ち上げ、新興産業資本家として成長する。

王秀山は戦前は町役場の助役。もともと世渡りのうまい人物で、戦後は上役にうまく取り入って銀行支店長となる。好色で拝金主義者。

林駿は日本の大学を出たインテリ。戦前は「郡守」という台湾人としては最高の地位にまで登りつめた出世頭であったが、戦後は地位を失い、人脈を頼ってようやく銀行の中堅職員となる。不遇が続き、脳溢血で倒れ半身不随

になる。

黄廷輝は戦前は日本企業の通訳、戦後は銀行員。小説の中ではほかの三人の人物を結びつける役目を果たす。タイプの違う三人（黄廷輝以外）がそれぞれの戦後を生きる様が同時進行で描かれるが、主要な筋としては劉三奇の成功物語がある。劉の成功の鍵であったのが銀行の融資を得るということであったが、支店長王秀山の好色ぶりに目をつけ、自分の愛人を使って王秀山をうまく丸め込み、最後は融資を勝ち取る。

劉三奇と林駿は好対照の運命にある。劉は一文無しから身を起こし戦後台湾の時流に乗った勝者であり、林は植民地社会において錚々たる学歴を有し高級官僚の地位を手にしていたにもかかわらず、戦後の台湾ではそんな地位も学歴も全く省みられない。そしてこの小説では、勝者と敗者を決定づける重要な要素に国語（中国語）能力があるということがしばしば示唆されている。かつては高級官僚であった林駿は、そのプライドも邪魔をしてか中国語が不得手であった。このような描写がある。

それから林駿を悩ますことがあった。それは北京語のことだった。公の会議の席上、どうしても北京語で発言しなければならなかった。台湾人の若い世代は、もう日本語を知らなかった。大陸から流れてきた人たちは、日本語はもちろん台湾語すら解らなかった。

それで林駿は、末の娘に北京語を教わったり、発音を糺したりしてもらった。〔第二章 牧野と島津〕

いっぽう要領の良い王秀山は次のように、中国語を習得することで世渡りしていこうと考える。

いままで日本人にさげすまれた大陸の人びとも、台湾にやってきて、台湾人よりも上の上司になるであろう。大陸からやってくる人に取り入るには、日本語も台湾語も役に立たず、それかといって、ただ頭をペコペコ下げたり、にこにこ笑ってばかりというわけにもいかないので、これから中国の国語である北京語を習得しなければならぬ。しかも急いでやらなければならない、と王秀山は思った。

（第三章 拍馬屁（ごますり）の男）

「ごますりの男」と揶揄される王秀山が戦後の台湾をうまく泳ぎきってそれなりの地位を手にするためには、中国語という新たな装置を是が非でも手にすることが必要だった。その彼のスタイルは戦前といささか変わるところがない。「ごますり」の相手が日本人から外省人に、日本語から中国語に変わっただけなのだ。

しかし一番の勝ち組であった劉三奇は、実は日本語も中国語も不得意であるという設定になっている。彼は日本時代にも国民学校しか出ておらず、日本人会社の下働きというどちらかというと低層階級に甘んじていた男である。だから彼が戦後台湾の競争社会を生き残っていくには商売の道しかなかった。

俺は商売に忙しくて、なかなか本を読む時間がない。たとえ、あったところで本を読めば、すぐ居眠りをする。年のせいかな。弁解がましいけれど、俺は日本時代の国民学校しか出ておらん。だから日本人にしても中国文にしても難しいところがあって充分にはこなせない。こんな事は人さまの前では言っていないけれど……。

（第十一章 媽祖も日本へ）

つまり、林駿のように日本語によって人生の勝利者となった者は、日本語の機能しない世界では自らの能力を示すすべを失い、茫然自失するしかない。王秀山のように言語の社会的機能に自覚的であったものは、それなりにうまく利用することができた。劉三奇のようにどちらにも習熟する機会をもたなかった者は、それを糊塗しながら別的手段によって幸福をつかむ道しか残されていなかった。この小説は、このような典型的な三人の本省人の生き様を描きながら、台湾の戦後社会の構造（あくまでそれは本省人から見えてということだが）を明らかにしようとしたものだと思取れる。

そこで気付かされるのは、龍瑛宗のデビュー作であり代表作でもある「パパイヤのある街」との関連である。実は「紅塵」は、「パパイヤのある街」とよく似た構造を持っている。「パパイヤのある街」の主人公陳有三は、町役場に赴任した時は勉強をして文官試験に合格し出世することを心に誓っていたのだが、職場の内外で出会う人間たちに振り回され、勉強意欲が徐々に衰退、好きになった翠娥との恋も成就せず、現実には打ちひしがれる過程が描かれる。この作品の重要な点は、役所の上司である日本人も含めた、いくつもの類型の人間を登場させていることである。それらの人間相互の間には越えられない壁が存在する。まずは統治者としての日本人と被統治者の台湾人という区別、そして台湾人の中では公学校卒、中学校卒、内地留学組というように学歴で厳然とした待遇の差が存在する。そして学歴の差は国語（この場合は日本語）力の差でもある。そこにさらに貧困などの要素が絡み合い、林杏南のように落ちぶれる者がいる。陳有三はいくら努力をしても目標に到達できない現実を知り、舞台であるさびれた息苦しい街に埋もれていく。このように複数の人間類型を提示することによって植民地台湾の階層構造を浮かび上がらせるといふ手法は、「紅塵」と共通するものがある。龍瑛宗の戦前の作品では「パパイヤのある街」以外

にはこのような手法を用いた作品はほとんど見られない。

楊逵ら台湾新文学派に遅れをとって創作活動をスタートした龍瑛宗は、最初から内地文壇の懸賞応募を強く意識した作品を書いていた。内地の日本人読者、さらに焦点をしばって言えば懸賞の審査員に対して、植民地台湾の「異郷性」をアピールすることが、とりもなおさず彼の狙いであった。和泉司氏はこれを台湾作家が内地文壇に進出するための「テキスト戦略」と称している。⁽²⁰⁾「パイヤのある街」受賞後の内地文壇の評価を見ても明らかだろうに、これは日本人が外地文学に求める、異郷としての台湾像を意識的に強調した作品であった。だとするなら、「紅塵」にもその戦略は受け継がれているとみなすのが自然である。もちろんこの場合、日本で何らかの文学賞に応募するなどという考えは毛頭なかったはずだが、彼が「紅塵」を構想した際に意識した読者像あるいは意識のしかたは、基本的には戦前と変わっていないからではないだろうか。

最後に

光復を迎え、内地文壇との経路が一夜にして断たれるという事態に直面した龍瑛宗は、しかしそれでもなんとか〈青天白日旗〉に持ち替えることによってその事態に対応できたと言える。それは台湾にまだ日本語文学の読者が存在しているという担保があったためである。だが、すぐそのあとにやってくる言語政策の急転換——日本語の禁止という局面にはなすすべがなかった。銀行員の生活に戻り三十年近くを過ごすうちに、台湾の日本語読者層は急速に消滅に向かった。もちろん日本でも同じ時間が流れ、文学をめぐる環境も、台湾にかかわる言説も一変してい

る。そのことへの理解が龍瑛宗にどれだけできていたのだろうか、「紅塵」が鐘肇政訳によって『民衆日報』副刊に連載された時、あまりの不評に連載は中断されたという。それは、「パイヤの街」が台湾では不評であったことと類似した理由のためだろう。といって、では現代の日本人読者なら受け入れられるかと言えはそこにもやはり困難がある。戦前のように植民地台湾の現実への興味が生まれてくる土壌が、すでに戦後日本の読者層には失われているのである。

「紅塵」は確かに龍瑛宗としては晩年の渾身の作だったかもしれない。日本語作品として発表の場を得られなかったことは不幸なことであったが、それ以前の問題として、作者自身の創作意図と読者層の実態とがこのようにミスマッチを起こしていたことも否定できない。むしろ、「媽祖宮の姑娘たち」後半部に描かれる個人的な記憶のほうを読者の心を打つ。龍瑛宗自身がどれだけ意識していたかはわからないが、「紅塵」のように作り込んでいない、作者自身の個人的体験をもとに素朴な記憶の断片を積み重ねたようなこの小説にこそ、龍瑛宗の本領が発揮されているように思われる。今回は詳しく触れられなかったが、「夜の流れ」も長い時間尺で客家台湾人の移民史を描く、それこそ現代日本人向けという趣を持った作品であった。そういう意味ではこの作品も読者への意識が先行した、「紅塵」や「パイヤの街」と同じスタンスの作品であると言えるだろう。「青天白日旗」は逆に完全に台湾人向けであったが、読者への意識が先行する創作スタンスはやはり共通している。

以上、龍瑛宗晩年のいくつかの作品を取り上げながら、彼が日本語作家として戦後という状況にどのように対峙してきたか、筆者なりの理解を示した。それぞれの作品分析においてはさらに詳述する余地はあり、また作品以外の周辺資料で今回取り上げることができなかったものも多々あるが、ひとまず龍瑛宗理解の足がかりとして、小論を締めくくっておきたい。

註

- (1) 一九七五年、現代文化社
- (2) 『新風』創刊号、一九四五年十一月
- (3) 『新新』創刊号、一九四五年十一月
- (4) 一九六三年六月から一九七二年六月まで発行された総合月刊誌。台湾の歴史文化を紹介する役割も担っており、毎号台湾作家の小説が日本語に翻訳され掲載されていた。龍瑛宗は創刊号から編集に加わっており、主に本省人作家の作品の翻訳と紹介をおこなった。詳細は王恵珍「一九六〇年代台湾文学の日本語翻訳活動について——『今日之中国』における文学翻訳とカルチュラル・ポリティクス」(『アジア遊学二〇四 交錯する台湾認識』二〇一六年 勉誠出版) 参照。
- (5) 『天理大学学報』一一九号
- (6) 『台湾近現代史研究』第三号、一九八一年一月
- (7) 下村作次郎・中島利郎・藤井省三・黄英哲編『よみがえる台湾文学 日本統治期の作家と作品』一九九五年、東方書店
- (8) 二〇一二年、ひつじ書房 (ひつじ研究叢書〈文学編 五〉)
- (9) 二〇一四年、国立台湾大学出版中心 (台湾文学与文化研究叢書・研究篇五)
- (10) 『愛知県立大学外国語学部紀要』第四三三号(言語・文学編)
- (11) 二〇〇八年、国立台湾文学館、陳萬益編集代表。日本語版と中文版がある。
- (12) 『だあひん』第五号、一九七九年四月、もぐら書房
- (13) 『日本統治期台湾文学集成1』『台湾長編小説集1』(下村作次郎編、緑陰書房、二〇〇二年)は長編小説『紅塵』のみを収録、塚本照和「龍瑛宗氏の『寡黙』と『微笑』」および下村作次郎氏による「作品解説」を付す。
- (14) 『旬刊台新』第一卷第三号、一九四四年八月
- (15) 例えば映画『悲情城市』では二二八事件の混乱の中で本省人が「外省人狩り」をする場面が描かれるが、そこで外省人か否かを判断するために日本語で問いかける、というシーンがある。
- (16) 陳萬益・許維育編『龍瑛宗略歴年表』(『龍瑛宗全集』日本語版第六冊)
- (17) 王恵珍「一九六〇年代台湾文学の日本語翻訳活動について——『今日之中国』における文学翻訳とカルチュラル・ポリティクス」(『アジア遊学二〇四 交錯する台湾認識』二〇一六年 勉誠出版)
- (18) 『龍瑛宗全集』日本語版第二冊所収、末尾に「一九五二、十二作」と記されている。これは原稿自体に書き込まれていた日

付と思われる。

(19) 『龍瑛宗全集』 日本語版第二冊所収、末尾に「一九七七年完稿」と記されている。これは全集収録時に加えられた注記のようである。なお、「姑娘」は中国語で「クーニャン」と発音するが、この小説ではルビが振られていない。

(20) 和泉司『日本統治期台湾と帝国の〈文壇〉』第一部